

公立中高一貫校
レポート #07

東京都立 大泉高等学校・附属中学校

[東京都練馬区]

広大な校地が伸び伸びした校風を醸成
中高一貫化を機に、新たなるモットー、
「探究と創造」を掲げ、21世紀型教育を目指す。

1941年開校の東京府立第二十中学校を前身とする大泉高校に、2010年度から中学が併設された。都心と郊外の狭間で、緑多き武蔵野台地の豊かさを感じさせつつも、モバイルを教育に導入したスマートスクールとして、新生面を見せている…

取材・文/鈴木隆祐 写真/松沢雅彦
デザイン/タケウチフミヒロ (landfish)

郊外の恵まれた立地にあり、広々とした校庭を持ち、綺麗に建て直された校舎もゆったりとした造り。正門からは校舎が見えない。130mもの長いアプローチが続き、両側にはたくさんの桜の樹が植えられ、学校のシンボルとされる。過去にも何度か取材で訪れたが、いつも穏やかで静かな

時間が流れ、都心部にはないゆとりを感じる。武蔵野一帯は他にも、富士・武蔵・三鷹と、中高一貫体制を取る都立校が多いが、中でも随一の環境ではなかろうか。

比較的近所に育ち、今も住む私には、大泉高校出身の友人知己が多い。かつては制服もなく、自由な校風で知られ、彼らも一様に大らかで気さくな性質。だから、とても親近感を持ってきた。ただ、他の都立進学校に比べ、そこまで明確な個性を打ち出していたわけでもなく、一貫化に際しても、人気のわりに、つかみ所のない学校ではあったかもしれない。

それが今、「探究の大泉」の志を掲げ、17年

鈴木隆祐/ジャーナリスト。1966年長野県生まれ。雑誌編集者を経て、執筆活動に入る。「主役は生徒、授業は命」をモットーに、全国の中学高校の取材を続けている。「名門高校人脈」(光文社)、「名門中学 最高の授業」(学研)など著書多数。

基本データ

沿革

1924年：東京府立第二十中学校として設置される。翌年、東京府立大泉中学校に改称(43年には都立に移行)。
1948年：学制改革により東京都立大泉高等学校となる。
1950年：松戸市立農商高等学校農業科を併合、農業科(後に園芸科と改組し、流山校舎に分離)設置。
1967年：学校群制度実施。石神井高校・井草高校と34群を組む。
1982年：グループ合同選抜制度導入。32グループに所属する。
1994年：単独選抜に移行。
2009年：東京都立大泉高等学校附属中学校を設置。翌年度から中高一貫化。
2017年：知的探究イノベーター推進校に指定される。

校長 俵田浩一

所在地 東京都練馬区東大泉 5-3-1

交通 西武池袋線大泉学園駅より徒歩 10分

出身著名人 亀井静香、待田京介、池上彰、森雪之丞、大竹伸朗、玖保キリコ、小林綾子、延友陽子、宇賀なつみ…etc.

には知的探究イノベーター推進校に指定。18年度の新高校生から「探究と創造(QC)」の授業も開始され、新たなフェーズに入っている。

QC指定されたのは他に三田高校、南多摩中等教育学校と計3校。いずれも2022年度までで、以降は他の都立校にも採用される予定という。先取りを担わされた格好だが、俵田浩一校長によれば、中学開設当初から、大泉にはこれに該当する

PCやタブレットに加え、モバイルも駆使する最新の学び事

2019年度 中学志願状況

例年総計7倍からそれ以上の程度の倍率をキープしていたが、今年度はいささか下落。都立は一貫校の数自体多く、過去のような記念受験者が減ったためだが、それでも倍率的には最上位に属する。というも、都心の学校と違い、単願で受ける受験生が多いためだ。

	定員数	受験者数	倍率
男	60	375	6.3
女	60	394	6.6

科目があったという。

完全一貫化を目の前にシフトアップ

「いわゆる総合的な学習の時間で探究活動を行ってきました。創立時から探究活動に取り組み、土曜講座も開いていました。しかし、これから都立の併設型中高一貫校5校がいっそう変わっていく。今年2月に発表のあったように、22年までに高校募集を停止します。富士・武蔵は再来年、当校や両国は22年までです」

ちなみに白鷗高校・附属中学校は、「施設設備の状況を踏まえて実施時期を決定」と、東京都教育委員会の年次発表にはあった。大泉は一貫化にともない校舎も建て替え、先進シフトに切り換えやすい学校だ。すでにBYOD(生徒が個人所有の携帯機器を持ち込み、それを学業に使用する)体制も取る、スマートスクール研究実習校でもある。

防音についての調査を照らし合わせ、「名探偵コナン」の謎を解く、バラエティに富む高2の「探究と創造(QC)」(左)。新進劇団を迎え、ワークショップを展開する中3の「自己表現」(上)



東京都立 大泉高等学校・附属中学校



中1は生命についての大学教授の講演会、中2は有名企業OBの講座で取り組むロボット・プログラミング…充実の講座で学習に向かうモチベーションを上げる

都立高10校がその指定を受けたが、普通教室すべてにWi-Fiアクセスポイントを設置するのが大泉、三田、南多摩、西、白鷗に加え、向丘に美原の7校。この7校はBYOD研究指定校でもある。1校につき16台のポケットモバイルルーターを配備するのが永山、若葉総合、東久留米総合の3校。当然ながら、Wi-Fi環境のほうがスマートフォンを難なく使える点では優位だ。

ICT教育も詰まるところ、自宅や公共施設と同じようにスマホが使えたほうが効率がいい。すでにPCよりスマホを上手く使いこなせる10代が主流なのだ。むしろ、スマホを所持していない生徒もおり、そのケアも必要だし、授業外での使用ルールなども考慮しなければならない。そのため研究校指定なのだが、スマホとPC、タブレットを連動させれば、非常にスピーディーに情報収集が可能で、多面的なICT活用にもつながるだろう。

そこで昨年度から開始された、このQCの様子を見せてもらうことにした。QCは数理情報、



生活環境、理系の自然科学に大別され、高1と高2は週に2時間通して、選択する探究科目関連の特別教室などに、グループごとに散り散りになって、課題に取り組む。まずは食堂へと足を運んだが、めいめいがスマホを手に車座になって語らう姿は、一見すれば食後の団欒。その前にホワイトボードが置かれ、ロジックツリーが描かれているのに気づき、これが自学自習の場だとようやく悟れる。



軽音楽部に所属しているという女子3人組のテーマは「ヒット曲」。その構造分析にかなり真剣に取り組んでいた。狙う年代、ジャンル、PR、タイアップやCM使用、媒体選び…。ヒットに鉄則はないのだが、今はネットでどうバズるかも大きな要因だろう。

各々の願いや疑問をぶつける探究

マインドマップを描きながらの、このやり取りを眺め、肝心の「曲そのものの力」について、彼らがどう思うか気になって尋ねた。ベースとボーカル担当の高2の中野明日望さんは「繰り返しのコード進行とか、単純で覚えやすい曲がよいのでは」と答える。

「例えばあいみょんとか、カラオケでよく歌われるけど、直接的な歌詞で歌いやすい。サカナクションの『新宝島』なんかも、シンプルな歌詞なのに深い。聴いていて癖になる感じ」

ツボを得た回答だ。分析でヒット曲が生まれるなら、ITにだってできそう。わかりやすさの中の複雑さ。そんな揺らぎの中に表現の魅力はあ



対話重視のアクティブラーニングの効果も随所に

る。中野さんのバンドはオリジナル曲で大会に出るのを目標としている。ネット社会で情報を得て、その中で流通するのを意識しながら、結局は外に出ないと、人の心に刺さる表現は生まれない。QCにはそんな今日的な問題提起も孕んでいる気がした。

一方で、防音の研究に取り組むチームもあった。部活は吹奏楽部で打楽器担当というリーダーは、軽音ではドラムを叩いているという。

「以前、バンドでスタジオを利用した時、天井に卵パックを並べたような防音加工がされていて、それで興味を持ったんです。スマホの音量アプリがあって、これで生活音をいろいろ計り、騒音のレベルを知って、どうすれば手軽な防音設備が作れるか考えてみたい」

たまたま音楽部の音響がりが、身近な疑問をスマホで調べながら、通常の彼らも生きている。BYODの教育的効果はもっと追究されていい。

英数において少人数授業で理解深めるのは、一貫校に共通のスタイルだが、大泉は中学発足時から都の英語教育推進校に指定されている。「使える英語力の育成」のため、「聞く」「話す」に重点を置いたきめ細かい指導を行うのが推進校のモットー。中でも古参の大泉は、積極的な方針を打ち出してきた。

中学2年の2学期には、英語スピーチコンテストを行う。そして、このコンテストの練習も兼

中1は国数英ともアクティブラーニング的な授業が上首尾に運んでいた。ことに創作と鑑賞の意義を同時に伝える、国語の俳句の授業には目からウロコが落ちた





音楽や体育の授業でも、自主的に統率の取れた動きを見せる高校生たち。体育祭が近づく時期の取材で、高2はリレー、高3はムカデ競走の練習に励んでいた

せるが、それを含めた自己紹介は6月になるようだ。なのに、生徒らは嬉々として like で自己を主張していた。うどんが好き、キムチが嫌いとか愛ない会話だが、この楽しさをつかまないと、すぐに苦手意識が生

ね、英語漬け生活を送る宿泊研修もある。福島県岩瀬郡天栄村の語学研修施設「ブリティッシュ・ヒルズ」での2泊3日の宿泊研修だ。

「パスポートのいらぬ英国」がキャッチフレーズのこの施設は、英会話のみならずカリグラフィやクッキングなどのレッスンもあり、イギリス式の暮らしが楽しめる。むろんオールイングリッシュが原則。生徒らはグループごとにそうしたアクティビティで息抜きもしながら、スピーチコンテストの練習に励むのだ。英語学習へのモチベーションを高めるには、効果的な舞台設定と言えるだろう。

また、生徒個々の課題学習に対応するシステム「ティーチャー・イン・レディネス (TIR)」も独自の制度。放課後の決まった時間に学習支援ルームにAT (アシスタント・ティーチャー) や教員が控え、生徒の自学自習を習慣づけるのだが、中学1年次の英語と数学に関しては、生徒全員が利用するよう割り振られる。

つまり開幕早々、相当みっちり詰め込むのだ。「習うより慣れろ」というが、これには観面の効果があるよう。取材時は4月末だったが、中1の英語 (表現) の授業を見ても、すでに相当先まで進んでいた。

着実に積み上げられる英語力

一般的な中1の指導計画作成資料を参照しても、I like/I can などの表現はその時点でも習わ

せてしまう。

中2の英語では、これまで習った単元のチェックリストを配り、担当教諭が、「アルファベットに始まり、もうこんなに覚えたんだね！」と生徒に呼びかける。生徒らも満足げにこの言葉に応じて、1年の確かな積み重ねを窺い知った。この時点では、一般動詞の疑問形も3人称、疑問詞 Why も使いこなせている。

中3ともなると、「中国旅行計画」というシミュレーションに基づき、3案ある中から、それぞれの観光スポットのよさをアピールする会話もできていた。同じ北京でも巡回コースは多様。万里の長城や紫禁城、頤和園辺りが定番だが、下町情緒が残る胡同を歩こうなどのプランもある。

むろん彼らの大半は中国には行っていないが、その辺もスマホを駆使し、情報を得るわけだ。高2になれば、全員参加の海外研修として台湾を旅行するので、まるで無縁なわけでもない。ちなみに高1ではオーストラリアに語学研修に向かう。



それぞれ現地校との交流もプログラムに含まれ、盛りだくさんの内容のようだ。

他に中1の国際交流としては「TGG 研修 (予定)」、中2では同窓会の協力による語学研修もあり、先述のブリティッシュ・ヒルズ研修、中3からはオンライン英会話 (中3では総合的な学習の時間内)・TGG 研修と、かなり英語漬けの環境ではあろう。

では、国語はどうだろう。中1では俳句の授業。これがなかなか斬新だった。前の授業で句会形式により全員が句を詠んだ後、その講評という内容だったが、教員が一方的によしあしを判断するのではなく、皆に投票させ、選ばれた句を黒板に書き付けていた。五七五の定型は守り、季語の縛りも設け、いずれも「からっぽ」という語を用いて自由に詠ませた句。

〈からっぽの 答案用紙 落第や〉

〈からっぽの 鳥の巣思ふ 巢立ち鳥〉

〈からっぽの 心の奥に 残る雪〉

担当する石鍋雄大教諭は「落第も実は春の季語なんだよ。あまり現実に起きてほしくないね」と教室の笑いを誘う。落第に春を感じるの、それこそ学生か教師か。『雀の学校』や『めだかの学校』に落第なんかなかろうな。ユーモア溢れる石鍋教諭の指導ぶりに、私はそんな戯けた夢想をしだす。

空想・妄想は俳句では御法度なのだが、読む人を確かな情景に引き込まねばならない。詠むことで詠ませるのだ。次いで俳句は取り合わせの妙と、「二物衝撃」と石鍋教諭は黒板に大きく記す。私は大学時代に俳句を専攻したが、中学ではこの

一橋、早慶 MARCH を中心に合格実績も伸ばす行事

大学合格実績

国公立大学名	2019	2018	2017
東京大学		2	6
京都大学			4
東京工業大学	2		2
一橋大学	6	1	3
東京外国語大学	2	3	3
東京医科歯科大学		2	4
お茶の水女子大学	1	2	1
横浜国立大学	2	3	2
筑波大学		4	1
首都大学東京	5	6	9
埼玉大学	4	1	1
東北大学	2	2	2

私立大学名	2019	2018	2017
慶應義塾大学	8	8	14
早稲田大学	32	25	54
上智大学	9	14	17
国際基督教大学	2	3	1
東京理科大学	18	19	42
明治大学	38	32	57
青山学院大学	13	13	17
立教大学	25	27	28
中央大学	21	17	24
法政大学	29	37	43
学習院大学	11	14	6
津田塾大学	3	3	4
日本女子大学	8	4	9

言葉を習わなかった。

様々な見解があろうが、俳句が写生に始まるのは確かだろう。先の3句はどれも稚拙に見えるが、まったく作為がない。「俳諧は三尺の童にさせよ」とも、「巧者に病あり、初心の句こそ頼もしけれ」とも松尾芭蕉は言った。この率直さにこそ俳句の文芸としての価値がある。

褒め合うことで伸ばす国語力

石鍋教諭は最初の句がよいと判じた生徒に挙手をさせ、その解釈を語らせた。「春といえばよいイメージだけど、その逆に行くのがいいと思って」と当該の生徒。「春は確かにそう、桜とか華やかなイメージがあるけど、これはいい“褒め”だね」と教諭。褒めることで伸びるのは、俳句も教科学習も同じこと。しかし、褒め方が大事だ。作者に名乗り出るように言うと、その生徒は「自分が思った以上の解釈をしてくれた」と照れている。

そこですかさず石鍋教諭は、「読者の力は侮れない。僕たちがよさを見つけてあげて、よりよい



俵田浩一校長は、様々な課題を担いながらも、「大泉の伝統は仲間意識」だと、互いに競争し、思いやる大切さを前年度の入学式挨拶でも説いた

俳句に仕立て上げるんだ」と、俳句を読む楽しみを伝えた。

「奥に雪…。名残惜しさを言い換えている。これは比喩の句だね。最後に選ばれたのは、これは作者がわかるかな…」と教諭が挙手を促すと、おずおずと手を挙げる女子生徒。「俳句から自分の気持ちや伝わるよ」と褒められ、こそばゆそうにしていた。うら寂しい言葉だが、巢立鳥は初夏の季語。取材時にぴったりの句に思えた。中1生らがこの学校を巣立つにも、まだ5年以上あるが、彼らが飛び立って、大空から見下ろす学び舎が、私の目にも見えてくる気がした。

理系の授業にも目を向けよう。高2化学では「アルミニウムの融解塩電解」の実験を次回に控え、その要諦をH教諭が説いていた。段取りを一通り説明すると、H教諭はおもむろにアルミ

の歴史を語りだした。それも券売機で小銭を落とし、1円玉が見つからなかった—という話から始めた。

「アルミニウムというのは奇跡の金属なんだよね。元素としては地球上に普遍的に存在しているけど、初めて金属の形で取り出されたのは1825年のこと。その歴史もまだ200年にも満たないんだね。初めてアルミニウムの分離に成功したのは誰だっけ？ そう、ハンス・クリスティアン・エルステッド」

立て板に水の、まるで講師のような語り引き込まれる。アルミニウムの製造工程は、鉱石からアルミナを分離抽出する工程と、アルミナの熔融塩を電気分解してアルミニウム（地金）を分離する工程の2段階からなる。エルステッドが塩化アルミニウムをアルカリ金属で還元し、単体分離に成功しても、まだ量産もできず、金銀よりも高価な金属として扱われていた。「1円じゃしょうがないや」では済まなかったのだ。

さらに量産法が確立し、広く用いられるようになったのは20世紀に入ってからのこと。その辺りもH教諭はマシンガントークで生徒の頭に叩き込み、実験へのモチベーションを上げていく。

中学生の給食を食堂で一緒に食べる。厨房で調理し、食材も東京で生産された季節の野菜を多く使用。



同窓会はサイトもまめに更新し、図書館にも卒業生の著作を寄贈。母校愛の強さを感じる。天体望遠鏡と一対で販売される天文台、共栄のマウナケアドームも備えていた

アルミ精錬の歴史は化学の進化を語る上で、この上もない題材なのだ。

大泉では中学生対象の「土曜講座」でも知的探究部を中心に、知的好奇心を喚起させ、自発的な学習を促す。発生生物学の道上達男東大大学院教授、折り紙を数学的に研究する三谷純筑波大教授など、バラエティに富んだ人選で、年間10数回開かれている。

「探究活動」の多彩なコンテンツ

高校生がQCに取り組む日、中学生も探究的な活動に勤しむ。取材日は東大大学院の道上達男教授の生命にまつわる講演を1年生が聴き、2年生は企業OBによる教育支援団体コアネットのロボット製作指導を受け、3年生は演劇集団20

適性検査の傾向と対策

適性検査I~Ⅲまでを課し、I・IIは共同作成問題、IIIのみ独自問題。報告書換算を各最大200点加味し、総合成績1000点で満点。

検査Iは100点→換算後200点で、文章内容を的確に読み取り、自分の考えを論理的かつ適切に表現する力などを見る。IIは100点→換算後300点で、資料から情報を読み取り、課題に対しての思考・判断力、論理的に処理する力、的確に表現する力などを問う。

Ⅲは換算後300点となり、与えられた課題について、資料などを活用して論理的に考え、的確に解決する力、表現する力などを見る。

歳の国のワークショップを体験するといった、これも盛りだくさんだった。

20歳の国は2012年に発足。「現代の群像を描きたい」と、その名をつけたという。以前の公演時にも、高校生向けのワークショップを開いたが、知り合いの伝手で観に来た大泉の教員に相談され、同校での演劇指導を引き受けた。今回、生徒らに体験させたのは『シン・ハムレット』。かのシェイクスピアの名作を、大ヒット映画『シン・ゴジラ』にあやかり、今回のために改編し、オリジナルであればゆうに2時間半かかる内容を45分にまとめた。中3生たちは何度かのレッスンの後、文化祭でお披露目の舞台に立つ。クラス全員に役が振られるため、幕が変わる度にキャストも変わる趣向だ。

主宰の竜史さんは「これまで何度かこうした機会を持ってきましたが、さすが進学校だけあって、みんな飲み込みが早い」と手ごたえを感じている様子。竜史さん他、劇団員の面々のエネルギーが、初めて手渡された脚本をただ輪読するだけでも、生徒らの振る舞いはどことなく芝居らしかった。

集団としての質の高さはこんなシチュエーションでも発揮される。それも授業を通じて、確かな表現力を磨けている、何よりの証左に思えるのだった。

同窓会の結束力も固く、あらゆる場面でバックアップ